

らくしん ふじゅうさんぎょう 洛神賦十三行

四世紀
(東晋時代)

魏 晉 唐 小楷 ⑤

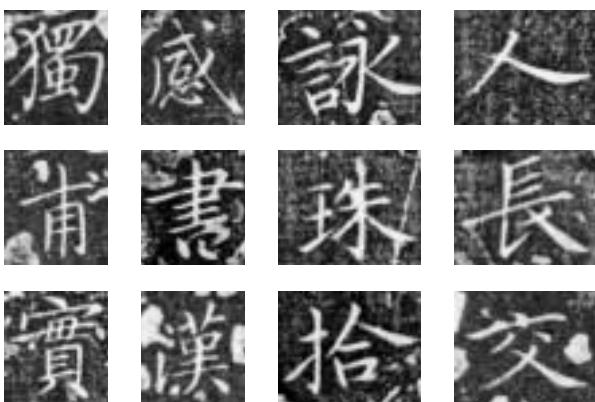
木 兮

木 雜室
伊藤 滋

図版② 洛神賦十三行 賈似道本原石写真



図版③



次号は、「破邪論序」です。
この欄に関するご批評、ご意見、
ご希望、ご質問などをお聞かせく
ださい。私宛に直接メールで、ま
た編集部宛にお送りいただければ幸
いです。伊藤 滋

魏の曹植の『洛神賦』を王羲之
が小楷で書いたとされる。宋の宰
相・賈似道が、その残本十三行分
を入手し、石に刻したとされるも
のが伝来している。明時代末期に
この原石とされるものが出土し、
現在まで伝えられている。(参照
図版②) 刻石を誉めて一般に「玉
版十三行」と称されている。(ま
た碧玉版とか白玉版とも言い伝え
られてきた) この原石を数十年
前に北京で手にしたが、「玉石」
ではなく、端渓石に近い感じの石
であった。この刻石は現在、北京
の首都博物館に蔵されている。父
の王羲之の書とされる「黃庭經」
や「樂毅論」とは、字形の結構が
異なり、やや扁平である。伸びや
かでありますながら、やや艶っぽい趣を
示している。楷書体であるが、三
水扁や一部に行書の筆画が使用さ
れている。図版に示した拓本は、
原石の精拓である。



書道芸術院

平成の群像 (2010)



小林 琴水 「墨作りと貫通力」



大字書と言えば墨色、墨色を出すのは大変困難である。天候、湿度、速度、筆圧によって随分違ってくる。紙にも合わさなければならない。唐紙、和紙で全く色が違う。また同じ紙、墨で書いても書く人によって滲み方が違う、筆先の紙へのくいこみであろう。不思議な現象である、墨磨り機で磨った墨をもう一度手で磨り直す、粒子をこまかくするために：墨作りには色々と工夫する。「宿墨」もその一つ。宿墨を使うには一番暑い7、8月に墨を磨り貯める。パケツに入れラップをして腐らせる。2ヶ月程したら上が透明で下にドロドロの墨が沈殿する。その透明の液が膠すごい悪臭がする。その上澄みを流して新しい水を入れる。また返しを何度もしている間に全く臭いは消える、そして磨り貯めて置く…。

古い物から使用するが、そのままでは滲まない、それに磨り立ての青墨を入れ好みの濃さに薄めて使うのだが、墨の機嫌を伺って始めて、スタンバイOK。体力、体調を充分整えて筆を持つ。格調のある書は、造形ばかり考えては駄目。心を沈めて、体、全体をリズムに乗せる。鋒先をつり上げたり、沈めたりして、筆先に心を入れなければいけないといつも言われてきました。大字書は、何と言っても勝負は早い、アッという間の一作である。調子書きになってしまいがちであるから、その調子を殺すことも技である。多字数の大字書はごまかしが効かない。一度書きは絶対出来ないし、筆を走らせたら一瞬である、考えている間もない、集中力を筆に託して紙に向かうしかない。

墨色が出ないとなかなか気持ちが乗らない。集中力の持続もむつかしい、瞬発力と集中力がぴったり合った時に作品が生まれる。私は、貫通力のある逞ましくて、スケールの大きな書を書きたいと常々願っている。

書のひろば

理事長 辻 元 大 雲

(財) 書道芸術院 5月定例 理事会・評議員会開催

- 1、平成21年度 事業報告
 - 2、同 決算報告、監査報告
 - 3、22年度補正予算（主な事業計画）の一部変更について
 - 4、人事
 - 5、秋季展 当番審査員（7）
 - 6、創立記念日講演会
 - 7、講師 片山由美子氏に依頼済み
 - 創立65周年記念事業実行委員会発足
- （財）書道芸術院の5月定例評議員会、理事会が5月15日、上野精養軒で開催された。
- （財）書道芸術院65年史
- 役員作品巡回展
- 功労者表彰
- 遺墨展・慰靈祭
- 院事務局担当
- 海外展
- 大野祥雲 小竹石雲 下谷洋子 小浜大明
- 大野祥雲 小竹石雲 下谷洋子 小浜大明
- 恩地会長・辻元理事長就任祝賀会
- 上野精養軒にて、毎日書道会、評論家、報道関係者をお招きして開催。院関係は総勢以上にご案内して総勢200余名の出席で盛会であった。
- 就任祝賀会の風景



就任祝賀会の風景

顧問 院会長・名譽顧問・常任顧問
実行委員長 辻元大雲
実行副委員長 大野祥雲 小竹石雲
下谷洋子

実行委員
事業担当

院理事・監事全員

顧問 院会長・名譽顧問・常任顧問
実行委員長 辻元大雲
実行副委員長 大野祥雲 小竹石雲
下谷洋子

毎日展関連のその他の行事

- 1 「生誕110年記念 松井如流・書・学一如の生涯」
- 2 第9回国際書法交流奈良大展
- 3 東魚展」に続き開催される。会期、会場は62回毎日展と同じ。

毎日展特別展示として前回の「松丸遷都1300年記念行事の一環として開催される。

会期 平成22年10月14日～19日
会場 奈良県文化会館

出品点数 約460点（日本約200点）
院関係出品者・役職（既報一部訂正）

恩地春洋（実行委員長）
辻元大雲（副実行委員長）

砂本杏花（涉外部長）
小伏小扇（涉外副部長）

小林琴水（涉外副部長）
小伏竹村・香川倫子・村野大仙

大野祥雲・浜谷芳仙・下谷洋子

小竹石雲・石井明子・飯高和子

鳥山岳風・山下皓映
記念講演会（阿辻哲次氏）、祝賀会などが行われる。

3 第25回毎日展中国研修旅行団

団長 辻元大雲
副団長 丸尾謙使（前衛・奎星会）

秘書長 山之内郁治（毎日事業部）

・ 事務所長 辻元大雲（継続）
・ 事務局長 千葉蒼玄（継続）
・ 事務局次長（法人担当） 上柳佳規（継続）
・ 同、書の教室編集 三浦鄭街（新任）
・ 会計部長 半田藤扇（継続）
・ 会計部長補佐 白石和楓（新任）
・ 東福青童（新任）

書道芸術院事務局体制

四谷事務所時代から院会計担当としてお世話をになりました榎原秀蘭先生が、この3月末をもってご退任されました。院の台所を陰に陽に支えてくださったご功績は言葉で言い尽くせないものがあり、深く感謝申し上げます。5月15日理事会の席上にて恩地会長、辻元理事長より感謝状と記念品、花束の贈呈を行いました。

また、書の教室編集および事務局次長として多方面にわたり院の運営を支えてくださった尾形澄神先生には、4月より故郷仙台の地へ戻られ、ご父君の跡を引き継がることになりました。祖父加藤翠柳先生の遺された宮城野書人会の事務局に入られ、運営の中枢を担われます。お二人の今後のご活躍とご健勝を祈ります。お二人の退任に伴い事務局体制を一新します。今後ともよろしくお願いします。

62回展会員賞・毎日賞受賞者より

現代詩文書（三）

坂本素雪



坂本素雪書

言語学者の堀江令以知氏（関西外国语大学教授）は「言葉というものは生きている限り揺れ動き、絶えず変化する。変化しないものは死んでいるのだ」という意味のことを述べている。また、金子鴎亭氏も「芸術に進歩は無い、変

化があるのみ」と相通じるような卓見をのべている。そして“芸術は変化だ”と。

我々書く者が詩文の内容を理解し、それを「線質」によってシンボライズ（象徴化）する事により、書芸術が誕生するものと思う。

詩文内容の受け止め方は、個々により皆違うのだから作風も様々であらねばならない。書派

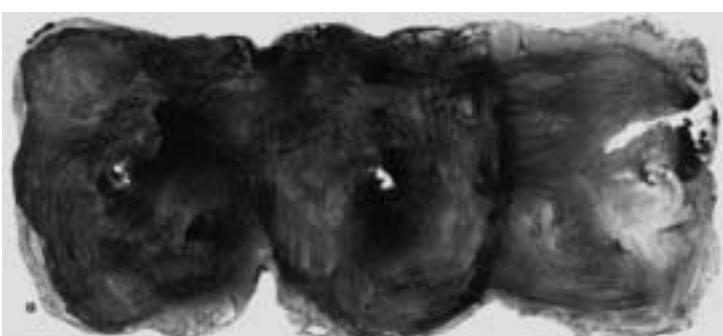
作風は大事であるかもしけないが、締め付けや強要は、もはや芸術の世界ではない。

初心者はいざ知らず、指導者は書表現に対する姿勢と芸術に関する広い見識を持つべきである。常に自己の芸術については自信の持てるだけの精進を続け、マネリズムに陥ることを避け、新境地の展開をはかり、現代の人的心、現代の人の感覚、情緒とはいかなるものであるかをみつめなければならない。

そして一番大事な事は自分自身が燃え続けることである。

前衛書（三）

平岡千香子



—私の主張—

—躰を調える—

これまで体調に気をつかうこともなく漫然と暮してまいりましたが、ジャスト・カン（還暦）に当たり、これまでの不勉強を自己反省し、古典に真剣に取り組み、“ほんまもんの線が引けるまで”と断酒を誓い決行。三ヶ月目に入った途端、歩行に支障をきたす痛みに襲われる羽目に陥りました。多分これは、“CO₂”ならぬ“潤滑油”的体外排出（？）により、躰が悲鳴をあげたものと推察しております。

“歳月は人を待たず”の言葉を知識として知っていたけれども、実践の伴わぬ実力の方は置き去りに、躰の方は素直に加齢。焦って、一気に遅れを取り戻そうとしても無理。どこかにひづみがくることを思い知らされました。日々の雑事にまぎれながらも、自分が惹かれる中国古典などに学びつつ、練度を高め、書の基盤を養い、感動するみずみずしい心を失うことなく思い続ける中でエネルギーを蓄え、沸点に達するや一気呵成に作品に挑む。生まれた作品は結果ではない。いつも過程であり、空っぽになりまた爆発する。この繰り返しが前衛書の眞の挑戦者の姿勢ではないかと考えています。

平岡千香子書

書の風景

大 西 春 雪

(現代詩文書部・審査会員)

昭和26年、小学3年生の夏休みの出来事が、今でもはっきりと思い出されます。毎日、友達と走り廻りまつ黒になつて過ごしていたある日、母に呼ばれ「今から行く所があるので着替えなさい」と手を引かれ、連れて行かれたお宅が、「松学舎大学名誉教授、金子清超先生のお稽古場でした。初めて見た教場は、小さな一人机が5・6台あり、そこで私の書道が始まりました。

「清真」という競書雑誌に「いねかり」と書いた作品が写真版に載ったときの喜びが書道を続けるきっかけになつたのではないか……と日々思い出します。中学生のとき、上野・東京都美術館に半切作品を出品し、「銅メダル」をいただき、ますます書道が楽しくなり、今は亡き、母や兄が夜なべに墨をつけて牛乳びんにためてくれました。そして、それを持ってお稽古に行きました。縁あって関西に嫁ぎ、東京への稽古

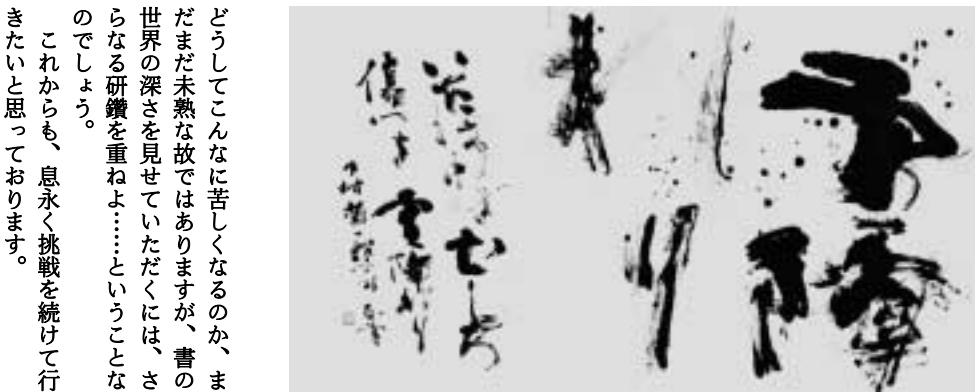
私が大変驚いたことは、「現代書」という部門がある……ということでした。それまで漢字と仮名しか知識のない私は衝撃でした。

何か子供っぽい字形に見え、その良さ楽しさを理解できないまま、詩文を探るために、詩集や俳句集を買い集め、いろいろ読んでみては、自分が好きな詩や句を手帳に書きとめてみたり……暗中模索とは、このことだと思われました。大きな紙面に文字を置く――「書く」というより「置く」という感覚にとらわれました。白(余白)と黒をして字形、さらに「ティフォルメ」という言葉も、漢字の原本を頭の中に置く大切な表現であるということを覚えました。

年月を重ねるうちに「なんと楽しい世界があつたのか……」と思うようになります。特に淡墨色に夢中になつた時期もあり、師の御指導のもと、筆の大・小・豪・柔による作品の魅力も、少しづつ理解出来るようになつてまいりました。

特に淡墨色に魅せられ、青黒ばかり目につき、「にじみの美しさ」に憧れ、絵画展を鑑賞してもその絵の中の淡青に見とれ、また、自「嫌悪に陥つたりと……」と日々思ひ出します。第1回に、マンネリ化し、行きづまつてしまふことがあります。せっかく自分自身で好きな詩文を選び、「ぜひ作品に書いてみたい！」と思つたはずなのに……

どうしてこんなに苦しくなるのか、まだ未熟な故ではありますが、書の世界の深さを見せていただくには、さらなる研鑽を重ねよ……ということなのでしょう。



第59回書道芸術院展 準大賞受賞

大西春雪書



第45回記念
院賞受賞
大西春雪書

特別研究部臨書課題

（全紙以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

〈解説〉北海王元詳造像記は、牛欄のようには、角ばらづぶわっと浮かして落とし、丸味を持たせている。起筆は高いところから勢いをつけて打ち込み、一旦落とした筆は、ゆっくり引廻しているようである。北海王元詳母子に関する造像には、別に「北海王太妃高」「比丘法生」の一種がある。

(編集部)

奉申前志。永願
母子長済化年。
眷屬内外終始

※落款を必ず入れる
署名、もしくは〇〇臨
(押印のみ也可)



かな研究部

高野切第三種

(伝・紀貫之) ③

※上記の掲載歌一首
以上を書く
(料紙可)
用紙・半紙普通判

<解説> 貫之時代のかなは、まだ一字一字

が独立し、連綿が発達していなかつたが、
こなして、すでにかなの完成期の姿を見せ
ている。今回の珍しい草仮名の形式はもう
一種あり、巻物全体に新鮮味を施している。
(編集部)

<よみ>

旋頭歌

だいしらづ

よみびとしらず

旋頭歌

あゝ風

ち浦むすゑ

そひきぬかさうりすまうす
 浦立木の社す満少枝手しづく久松
 まろは移下お奈にも

※落款を必ず入れる。○○臨 (押印のみも可)

(86%縮小)

習い方解説 (三)

濱田尚川

窮探極覽

(きゅうたんきょくらん)
どこどこまでも尋ねきわめ
奥底までも見ぬく。

蘭亭帖、集字聖教序の氣品、筆

勢、韻致を学ぼう—温健精妙

行書になると字形の変化、点画

の連綿、運筆のリズム等に動きが

見えてくる。氣脈が大切になつて

くるので墨つぎに留意すること。

扁から旁へ筆が自然に続くことが

大切です。一字は一筆で仕上げる

ことですね。半紙で練習する時で

も二字を一筆で書くこともやつて

みてください。運筆のリズムをつ

かみながら線の大小を常に工夫す

る努力を。字形よりも線質に目を

向けて研究し、更に違った表現で

創作に挑戦してほしい。



習い方解説(三)

小川弘舟

行雲流水(こううんりゅうすい)

空行く雲と流れる水。

自然に逆らわず、執着することなく、成り行きにまかせて行動するたとえ。



書体=楷書

今月は、初唐の三大家といわれた虞世南の「孔子廟堂碑」を参考にしました。整った美しい楷書として名高い古典です。起筆は直筆で穩やかに入り、送筆部でもゆるまないようにしてはねはあまり大きくはない、字形は向勢(丸味のある形)で縦長、右払いが比較的長く、角張らず穩やかに払う。外見は穩やかだが内面に力を藏した楷書です。

穏やかな気持ちになり運筆するこ

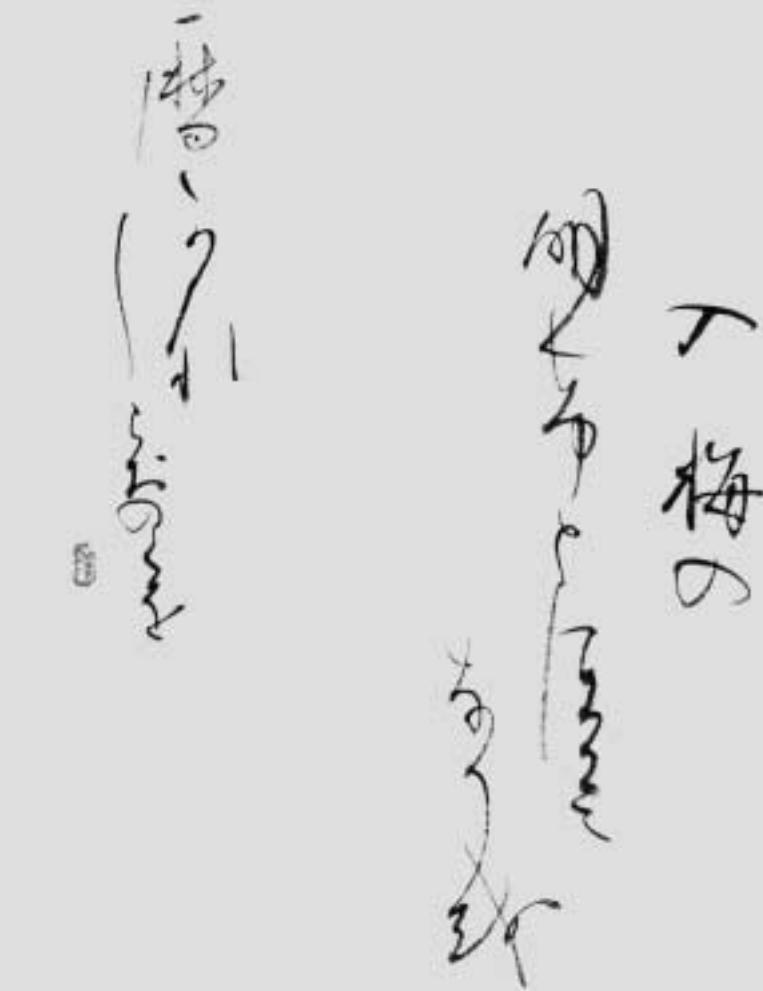
かな規定 初段以上【七月十五日締めきり】用紙 半紙普通判(料紙可)

下谷洋子選書

習い方解説 (三)

下谷洋子

入梅の明け遅かみなりを曆かな
(加舎白雄)



よみ方 入梅の明け(希)とほか(可)み(三)な(奈)りを(越)曆か(可)な(那) しらおのく(久)を

創作

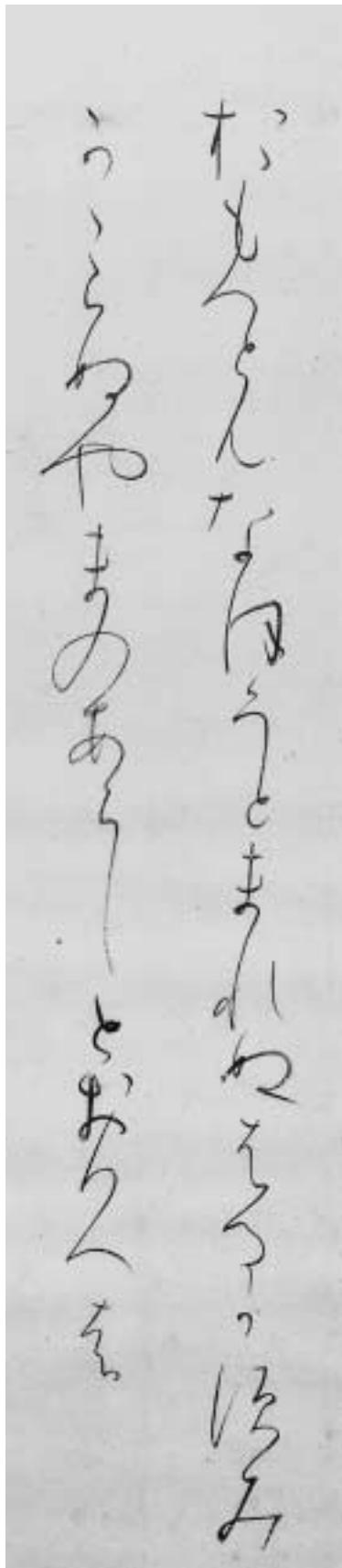
加舎白雄は、江戸中期の俳人

昔から“つゆ明けは雷を伴うことが多い”と言われています。遅かみなりを聞きながら曆通りだと安堵したのかもしれません。俳句を半紙に書く場合、一般的には三行が多いですが、余程文字の大きさや漢字とかなの調和を考えないと貧相になります。小さな紙面でも大きな宇宙を感じさせるような作品創りを心掛けたいと思います。そのためには文字の選択と全体の配置が重要になります。しまよう。例えば、明け、とほかみなどは変体かなを使わないと同じような形の字が並び連綿もしにくく流れも出しにくいで、より自然なリズムを創るために使います。連綿するときは、連綿しやすい文字の組み合わせがありますから、十分な研究が必要です。

かな規定 秀級以下【七月十五日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全體、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方 お(於)もへども(元)なほ(保)うとまれぬは(者)るが(可)す(須)み
か(可)へらぬやまのあらじとおも(无)へば(者)

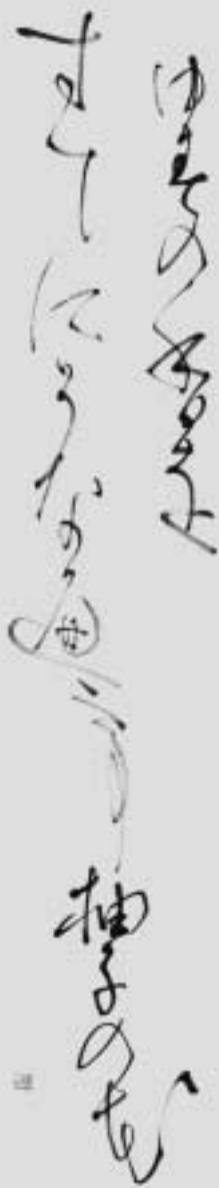
習い方解説 (三)

奥田瑞舟

柚子の香をすでに備へて 柚子の花
(藤原海塔)

花

花



かな条幅規定【七月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切(料紙可)

奥田瑞舟選書

よみ方 ゆず(春)の香をすでにそ(置)なへ(廻)て(亨)柚子の花

創作

字数の少ない俳句は、ただ一行に書いては単調になったり、寂しくなりやすい。少字数でまとめることは意外に難しいものです。
構成に動きができます。
二行であって、二行ではない、しかし三行でもない。というような流れ、行の幅を考えて書いてください。一本調子でないように。

*たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 [七月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

半田 藤 扇選書

習い方解説 (三)

半田 藤 扇

木簡の意を念頭において表現してみました。

隸書には、魅力的な書きぶりが多くあります。横線を引く時も、うわべりの線にならぬ様に、リズムに乗って引くことに心がけてください。また、単体文字の場合でも、一貫性の流れのある作風を創りあげてみましょう。

羊毛筆の長鋒を使用。



螢穿濕竹流星暗魚動輕荷墜露香
(螢は湿竹を穿ち流星暗く、魚は輕荷を動して墜露香ばし)

漢字条幅規定 秀級以下 [七月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

吹田 紅扇選書

習い方解説 (三)

吹田 紅扇

絵を取りあげました。

「路は遙かに連なっているが筆はそれより早く妙境に到達している。画家は自然の変化を把握せねばならない」との語句。

今回から行書で表現します。太目の中鋒を使用しました。



路渺かにして筆先ず到る

(石濤「書語録」)

書体=自由

(路渺かにして筆先ず到る)

習い方解説 (三)

小伏小扇

北へ都が遷されたのも平城京は
とちりたてしましたのびとよみか
その歴史を紐解ソソクフチに
活力旺盛な古代日本の姿が見え
てきました ひととき特集うち小扇書

行書は流動性がありますから、大きさや位置が画一的にはなりません。漢字はやゝ柔軟にし、かなは空間を引きしめ、上滑りせぬよう転折に意識してじっくり書くよう心掛け、互に歩み寄るようにします。

ペン字は「正しく、はやく、美しく」書くものですが、そのためには、丁寧に書く積みかさねが必要です。

*落款を入れ忘れないようにしてください。
さい。(落款は自分の名前を入れてください)

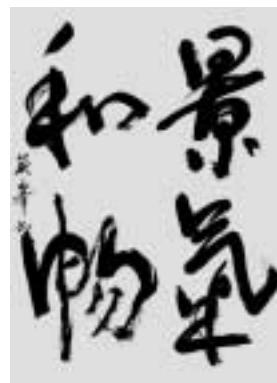
用紙=はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体=自由

今月の

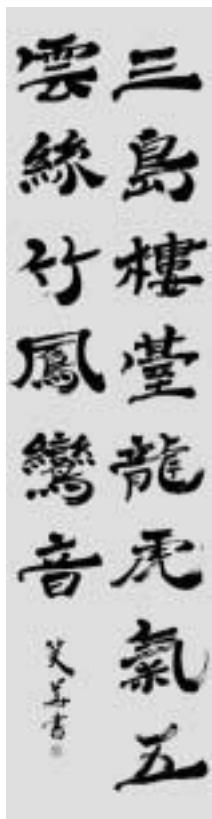
ホープ作品
各部総評

No. 588



漢字部 師範 徳田 萩峯
独特的強靭な線の響きを持った書風も、永年の学書によって暖かさと余情を伴って魅力を生む。

◎漢字部総評 隨分長い書歴を感じさせる作品もあって心強い。書は人間の表現である。高齢化も人生経験の深さと思えば。(春洋評)

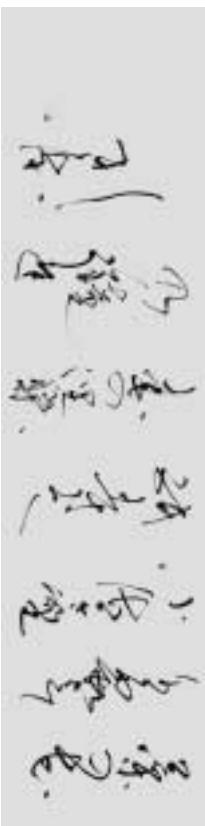


現代詩文書部 特選 佐々木青霞

堂々とした運筆。筆が開き紙に
くい込み重厚な作風を醸し出している。白が浮き出ている。



かな条幅部 師範 武藤 房枝
かな字を多用しながら、安定した書きぶりと抑制のきいた表現で行間が美しい。格調高く秀逸。

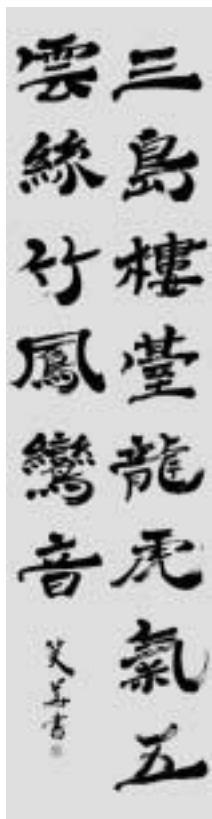


漢字条幅部 師範 村田 笑華
木簡昂書風を得てリズムよく表現。安定した筆致で全体の調和を醸し、着実な作品である。

◎漢字条幅部総評 条幅作品は書体の違いにかかわらず氣脈の通貫が大切である。一幅としてのまとまりをよく考えたい。(大雪評)

かな部 師範 北村 恵舟
線の太細・リズム・墨量など、非常にバランス感覚に秀れた佳作。基本が確かなので今後に期待!

◎かな部総評 毎回繰り返しますが、字形やリズムは掌握していても、紙面に對して小さい・細すぎることなど多く残念です。(洋子評)

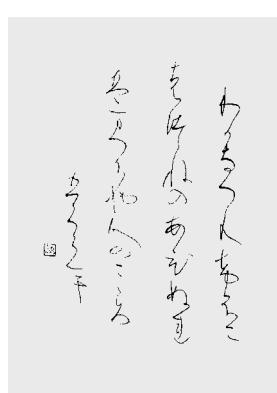
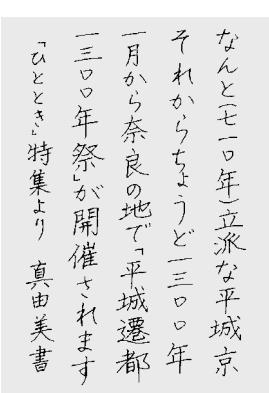


前衛書部 特選 亀井 勤

渴筆による構成は、紙面いっぱいに躍動し、表現を豊かにしながら美しさを保っている。



◎前衛書部総評 全体的に構成がよく線質も向上、新たな発想もみられ、次回も楽しみ!!(光昭評)



今月の

特別研究部 優秀作品（特選）



60×180cm

西川藤象書

漢字
(もくせい)

西川藤象

「擬送別」

- ◆ 細い線質で字の孤立を防ぐように連綿をつかい全体の流れが息き切れる事なく構成され素晴らしい。やわらかい毛筆で書いて見ても如何? (倫子評)
- ◆ 切れのよさは抜群である。一字一字の造形も工夫され目を引くがそれがどうのとささにもつながっている。饒舌な形のとなりには沈黙をが似合う。(蒼玄評)
- ◆ 筆の表現力を多様に駆使した見事な作品です。恐らく計算し尽しての制作と思われるが、呼吸の深さ、大きさが伝わってきて楽しい。(明子評)
- ◆ 鋭いタッチでリズムよく横展開させた安定の作。大小、潤渴の変化もバランスよく爽快感あり。やや計算が見えすぎるかも。(大雲評)

(大雲評)



180×60cm

相内珠莉書

(白珠) 相内珠莉

前衛書

「逢」

総評

新規格で始めた特別研究科も平成16年より6年になる。私の名もみえるが、あの頃はほかの部門に挑戦することが楽しみだった。

今回は90点(漢20、か11、現25、前33、篆1)当初は85点なのであまり出品点数は増えないが、出品のメンバーはだいぶ変わった。この研究科から育った人も多いだろう。来月からはまた新たに臨書が加わる。作品はその人自身だが、臨書はその人の古典解釈の思想である。また新たな展開があることを期待する。(蒼玄)

- ◆ 上下の形が中央の白を引き立たせて輝く。筆の使い方も動きと変化を表出して佳作である。右への流れに対する印の位置も目的を得ている。(蒼玄評)
- ◆ 前衛作品の妙味、余白美は心憎い墨色に支えられ、巧みな筆致が軽やかな動きとなって、三次元を感じさせてくれる。(明子評)
- ◆ 厚手の二層紙の特性を生かし、青淡墨の潤渴で動きある表現はみごと。渴筆部や走りすぎの感もあり、鋒先のくい込みがほしい。(大雲評)
- ◆ 筆の動きに連がりを感じさせてくれ余白が一際生きて来ている。墨の色も筆の呼吸を伝えてくれるような細い表現が感じられ心温まる気持ち。(倫子評)

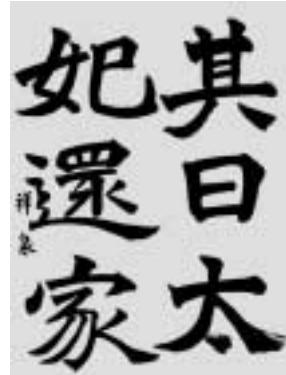
漢		墨宣		篆	
一弦	木村貴衣	惠雅	板橋雅邦	前行徳	墨宣
書泉	田村玲子	江本興舟	白嶺	大雲	大雲
現陽々	岩崎陽光	坂井初江	青蓮	長島櫻雨	長島櫻雨
游水	荒川空華		秀水	中山無硯	中山無硯

（特選候補者）

漢字研究部
(北海王元詳造像記)

選評 大野祥雲

今月のホープ作品



森下祥泉



洋弘魯 洋玉雲
子晃春子 華卿

谷千加紫久理
秀彩子 翠子恵

由純ま陽光青
紀風き光子山

白香悦惠 覚哲
杏月子子山子

漢字研究部 特選 森下祥泉
六字を伸びやかに書き、しかも余白を生かしたまとめ、明るい作品です。台形の字形、充実感のある線質、鋭く打ち込んだ始筆、押し出す送筆、どこを見ても見事。造像記の気魄と純粹さをご自分の書に生かしてください。

◎漢字研究部総評
北海王元詳造像記は唐代の楷書と比べると自由で未完のよさがあります。自然で伸びや

かで味わい深く、しかも迫力を感じます。臨書に当っては、視覚でわかる字形、線の太細、長短などしっかり見てから筆を持っていただきたいです。また、線質(強弱、軽重)を見抜くこともより大切です。太細、長短などしっかり見てから筆を持って書く方がいました。虚心でそれぞれの古典のよさを吸収するのが臨書だと思います。

かな研究部
(高野切第三種)

選評 田村澄子

今月のホープ作品

しらはりのれきゆもじくとや
こほのわやまのけふうて
さとうりいひのまけふう
めくらでなまくとやうて
かこがくとよむくとよむく

書石賀開

松丸愛石

明朗、字形と見事にまとめ格調ある作品にした、
日頃の練度が思われます。ますますの精進を期待します。
◎かな研究部総評
全体的に第三種を理解した作品が多く見られ、うれしいです。手習のはじめには、この古筆を利用す
るといわれ、唯倣書の様に書かないよう、臨書第一。

かな研究部成績表



しらはりのれきゆもじくとや
こほのわやまのけふうて
さとうりいひのまけふう
めくらでなまくとやうて
かこがくとよむくとよむく

彩可彩
香三華

恵美龍
加舟子博

佳麻佑
栄美朋

雲桂初
卿香江

藤秀石た秀岩も
明習か明沼く秀
も竜豊竜千彩澄東Aこ春五玉泉千幕高竜こ正梓千英秀石
く泉田泉葉 春光Iだ汀葉松会葉張崎泉だ華江葉峰水習

大大内岩岩石青作
八森田田崎崎木木
芳喜皓春洋正啓
蘭代泉燈子子子

松泉小後猪岸字小伊大藤森小田平北小森五佐大神佐高松
本水野藤又田田暮藤石井田川野山村峰十藤橋谷藤橋丸
寺美川 美鳳

藤龍玉知理東春昭寿星晴睦影可彩意加龍佳麻佑雲桂初愛
侍宝華子扇子華子二子祥子子香三華舟子栄美朋卿香江石

高崎佳
坪明昌竹如椿紅A椿前青玉艸江翠や渡 童彩 明湘竜高竜戸東若調如英椿
和漢苑美月翠苑I翠橋青松玄龍柳ま辺 泉 漢南泉崎泉出小葉布月峰翠

青木江理子
作若吉吉横八百茂藤平春林橋中鶴近田田高高関社嶋佐櫻酒後小小工木金片岡
菜田田山木木木木井山 本澤田池玉口山橋口本 与 美み
矩鶴翠蘭順代真昌栄勝雙紅雅惠柳哲み花雅秋三称詠龍惠良千さ山翠蘆美十
子子綾舟子子蘭子子美鶴霞子子芳子子泉泉麗と子子貞子泉代ゑ房憲城代夜

も生竜高
大泉陵入
蓮も松硯大正大洞硯秀大森秀泉華高土長千八東桝大生正千広蘭竹大秀N泉清A土澄大誠石正大春千洞権松
紅く村水雲華雲書扇水阪地水会祥瑠陵氣月葉雲小江雲大華字島鼎扁阪水H会月I気春阪和習華汀葉翠村

新新浅會
井井川木
み
藤廣勇
雪子江介
遊森茂宮堀星福濱野富徳東寺辻玉高住杉杉済七佐近黒君木北川川河河門加小江生白字岩入犬伊磯石飯安安阿
佐木澤切野川田村澤田平澤 木木吉田浦谷條久藤柳島原川本崎岡合脇藤高田方井根谷飼貝橋田藤藤由
美理間
紅藤翠草幸佐和竹陽蕙萩絹悟洋恵合和麗菊愛裕節明竹春輝 紫優星智信真西茂美綾楠恵悠道英清知喜光楊代
雅谷芳秋雲枝香雪詩園子子葉子子枝華美子敏葉翠子祥仙子扇子子澄鈴夫子乃麗峯花石子彩風子

道英
正大誠顧皓玉
峰
華阪和綠映松
か佳る美書春峰ま蘆橋吟阪南桜曜祥谷阪紅島玄大阪峰田
鰐鉢山澄英や三京翠大湘筑木華四大蓮広艸生大青蒼 大桂玄上椿高昭東遊紗久竜桂和N八生大大
峰
鈴鈴菅神新志重塩猿狼佐松櫻酒齋齊齋後近近小小黒熊木岸菊川龜金金鹿小小押小尾大遠梅宇薄上植岩今井井伊市石池飯
木木谷保野谷水信澤渡藤 田井藤藤藤藤林嶋口江野原本池本井田岡島野野山川形沢藤山野田木測村野上藤川橋田木
たひ
え多悦佳萩翠起裕冬蕙華優智花翠早つ祥松閑史路智幸谷尚萩玉南紫辰萩裕理萩純輝紅淑琪久華春啓如祥貴玉英良紫さ萩惠
子美子碧光子映紅華右炎子舟雪香苗え子春窓江子子穗涼子茜蓮汀風夫美子絵光子峯霞江楽子泉綠翠風苑泉香ニ佑泉子溪萩

う大京北己白華佐玉艸梵澄
遷外
203渡名氏名略
吉山山山谷村三宮三松松松增前前前堀藤福深深比浜島橋丹西西土戸富都刀津田玉田田高高高砂砂鉢
波田田根崎崎口知田宅内島佐岡田花田島川島堀澤田本山本羽村岡居村田丸根田丸岡中中橋橋野川木木木木
天擎佑四美香桜 美珠白幸敏陽映翠白律華麗幸代魯純歌清佳代ズ芝都恵桂悦京博萩ど美幸貞萩千賢沙昌杏洋疏利智
川玉子子織江毅子風楊平子子華舟鈴子秀子子春一子洗月子エ香子子苑子仙舟彩り芳子子翠惠子代雲風蘭華子華子